

県指定 有形文化財

神内釈迦堂石幢



この石幢がある場所は、中世の頃堅田郷から赤木、仁田原、因尾、宇目郷に通ずる要所の地で、佐伯方面から番匠川に沿って街道があり、各郷に通ずる交通の接点であった。石幢は、室町後期の天文18年(1549)の造立てで、地上2.2メートル、積み重ね式基礎の納穴に塔身上部が安定して建てられている。塔身は普通、八角や六角であるがこの塔は四角で、中台龕部、傘も四角である。特に龕部四面の各面を二区に分け、二仏を浅い浮彫りにして八仏を配している。石幢は六地蔵が本体で、全く特殊な形式である。